

川棚町文化財調査報告書 第1集

あ　そ　ぜ  
麻 生 瀬 遺 跡

2006

長崎県川棚町教育委員会

川棚町文化財調査報告書 第1集

あ そ ぜ  
麻 生 瀬 遺 跡

## 発掘にあたって

この報告書は、平成15年6月に実施した麻生瀬遺跡の発掘調査の記録です。

この麻生瀬遺跡は、平成15年2月に排水対策補助事業施工の際に偶然発見され、土地所有者をはじめ、関係者の埋蔵文化財に対するご理解により発掘調査を実施することができました。

川棚町では、以前にもこの遺跡の近隣である五反田郷において五反田遺跡が発掘されており、かつてこの地に弥生時代の集落があったものと思われます。今回の発掘調査においても、石棺、土器、石鏃など多くの遺物が発掘され、特に土器は、完形に復元できる資料が発掘され、川棚町の歴史に新たなページを加えることができました。また、こうした遺物により古代から川棚町が住みよい土地であったことが明らかにわかりました。

このような遺物は古代の習俗を偲ばせる貴重な資料であるとともに、後世に伝えていくべき財産であります。麻生瀬遺跡の調査を記録した本書が文化財保護行政及び学術の振興にささやかながらも寄与することができれば幸いに思います。

最後に、麻生瀬遺跡の発掘調査に格別のご指導とご協力を賜りました、長崎県教育厅学芸文化課をはじめ関係各位の皆さまに心からお礼と感謝を申し上げ発刊の言葉をいたします。

平成18年3月20日

川棚町教育委員会  
教育長 谷山 健治

## 例　　言

1. 本報告は平成15年度に実施した排水施設工事に伴う長崎県東彼杵郡川棚町に所在する麻生瀬遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は川棚町教育委員会が事業主体となり、東彼杵町歴史民俗資料館主査 下田章吾が調査を担当し、長崎県教育庁学芸文化課が補佐した。  
調査は、平成15年5月19日から6月20日の間実施した。

3. 調査主体者および担当者は次のとおりである。

調査主体	川棚町教育委員会	教育長	谷山健治
同		教育次長	石橋良一
同		社会教育係長	大川豊文（平成16年4月～）
調査担当	東彼杵町	歴史民俗資料館主査	下田章吾
長崎県教育庁学芸文化課		主任文化財保護主事	川道寛
同		主任文化財保護主事	古門雅高
同		文化財調査員	樋口健太郎

4. 遺構の実測は、下田・古門・樋口・川道が行い、製図は樋口・浜崎美加が行った。
5. 遺物のうち石器の実測は、中村ヒロ子が行い、製図は川道が行った。土器の実測・製図は松原蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 本遺跡の遺物および写真・図面等は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
7. 本書の刊行にあたって多くの方々から援助を受けた。記して謝意を表します。
8. 本書の執筆・編集は川道・古門による。

## 本文目次

発刊にあたって

凡例

目次

第1章 調査の経緯.....	7
第2章 地理的・歴史的環境.....	7
第3章 遺構.....	11
1. 箱式石棺.....	11
2. 壱棺.....	25
3. 朱石造構.....	28
第4章 出土遺物.....	29
1. 石器.....	29
2. 土器.....	30

## 挿図目次

第1図 川棚町遺跡分布図 (S = 1/50,000) .....	6
第2図 麻生瀬遺跡周辺地形図 (S = 1/10,000) .....	8
第3図 麻生瀬遺跡遺構配置図 (S = 1/200) .....	10
第4図 第1号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	11
第5図 第4号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	12
第6図 第5号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	13
第7図 第6号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	14
第8図 第15号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	15
第9図 第17号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	16
第10図 第18号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	17
第11図 第22号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	18
第12図 第25号箱式石棺実測図 (S = 1/20) .....	19
第13図 第1号壹棺実測図 (S = 1/10) .....	26
第14図 第II号壹棺実測図 (S = 1/10) .....	26
第15図 第IV号壹棺実測図 (S = 1/10) .....	27
第16図 麻生瀬遺跡出土の石器 (S = 2/3) .....	29
第17図 麻生瀬遺跡出土の土器(1) (S = 1/6) .....	31

第18図 麻生瀬遺跡出土の土器(2) (S = 1 / 6) .....	32
第19図 麻生瀬遺跡出土の土器(3) (S = 1 / 3) .....	34

## 表 目 次

第1表 東彼杵郡における遺跡数.....	9
----------------------	---

## 図 版 目 次

図版1 調査風景.....	7
図版2 第Ⅲ号甕棺（土器番号1）.....	35
図版3 第Ⅳ号甕棺（土器番号2）.....	35
図版4 出土場所不明土器（土器番号3）.....	35
図版5 第Ⅱ号甕棺（土器番号4）.....	36
図版6 第1号石棺内出土土器（土器番号5）.....	36
図版7 第15号石棺隣接地出土土器（土器番号29）.....	36
図版8 出土場所不明土器（土器番号6）.....	37
図版9 第Ⅰ号甕棺（土器番号7）.....	37
図版10 第Ⅰ号甕棺（土器番号8）.....	37



第1図 川越市道路分布図 ( $S = 1/50,000$ )

## 第1章 調査の経緯

平成15年3月、川棚町教育委員会から五反田遺跡の近くの畑から石棺が発見されたという報告があった。現地は、水はけがきわめて悪く、そのため幅約30cm、深さ40cmの暗渠を造り、排水用のパイプを埋める工事を始めたところで4基の箱式石棺が重機による掘削で検出されたということであった。学芸文化課は現地を確認するとともに、今後の方針を検討した結果、予算的に年度内の調査は困難ということであり、翌年度中に発掘調査を実施することとした。

学芸文化課と川棚町教育委員会の協議の結果、本調査を東彼杵町歴史民俗資料館の下田章吾主査に依頼することとし、平成15年5月19日から調査を開始した。その時点では暗渠にかかる石棺は8基であったが、石棺を露出する過程で次々に新たな石棺が検出されたため、收拾がつかない状況となつたため急遽学芸文化課が応援することになり、5月27日から調査終了まで実測の支援を行った。

発掘の手順として、工事に支障のある石棺等については完全に発掘するとともに実測・写真等の記録をとることとし、周辺から検出された遺構については、上面の検出にとどめかつ実測は時間の関係でとることを断念し、写真による記録にとどめた。

また集石遺構については、調査期間の関係から実測記録を残すことができなかつた。

今回の調査で検出された遺構は、箱式石棺25基、壺棺3基、土器溜め1基、集石遺構7基の合計36基である。きわめて狭い面積でありながら密集度は非常に高い。周辺には相当な密度で遺構が集中している可能性がある。しかも箱式石棺と集石遺構は混在せず、分布域を違えていると考えられる。

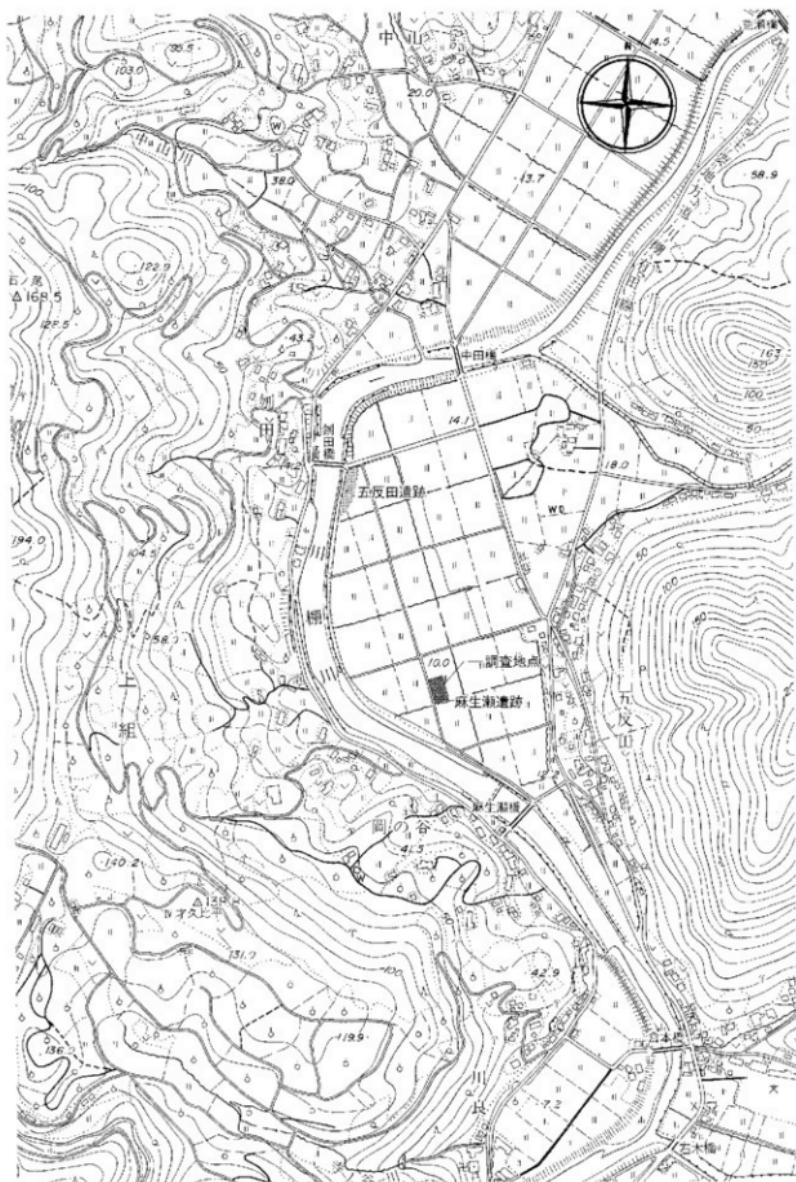


図版1 調査風景

## 第2章 地理的・歴史的環境

遺跡の所在する川棚町は、大村湾の北岸、川棚川中・下流域に位置し、周囲を佐世保市・波佐見町・東彼杵町及び佐賀県嬉野町と接する。町の面積は、37.24km<sup>2</sup>を計り、人口は15,495人（平成17年3月31日現在）である。

川棚川は、波佐見町と佐賀県嬉野町との県境である桃の木峠に端を発し、波佐見盆地を南流して、下流域で猪衆川、石木川と合流して大村湾に注ぐ、2級河川で、全長21.8km。本県では佐々川に次ぐ2番目の長さである。川棚町の地形は全体に山がちで、川棚川流域以外にはほとんど平野部がみられないため、集落も川棚川河口の平野部を除けば、河川沿いの河岸段丘に営まれている。町を2分する川棚川の東部には虚空藏山（608.5m）・猪見岳・高見岳（538m）・女岳などの山々があり、集落はあまり発達していない。川棚川の西には、東部ほどの標高の高い山はみられないが、弘法岳（387m）や白岳（300m）に代表される山々があり、東部と同じく平野部は限定される。



第2図 麻生瀬遺跡周辺地形図 (S = 1/10,000)

麻生瀬遺跡の所在する川棚町は、地勢的に山地が大部分を占めるため、概して遺跡数はそれほど多くはなくむしろ希薄な地域ということができよう。長崎県教育委員会が平成7年3月に刊行した遺跡地図によれば、30遺跡が記載されており、これに今回報告する麻生瀬遺跡を含めても31遺跡に過ぎない。時代ごとの遺跡数では縄文時代が最も多く、ついで近世・中世の順であり、古代は全くない。

旧石器時代とされるのはいずれも岩陰遺跡であり、遺物等も実見できないので、断定はできないが、定形石器の出土がない限り、旧石器時代と認定することには慎重でありたい。縄文時代の遺跡は、山顶付近に所在し500mと突出するもぐり岩陰遺跡を除いた平均標高は71mである。弥生時代の平均標高14mに比較すると遙かに高い。このことは弥生時代の遺跡が占據するのが低平な沖積平野に営まれることが一般的であることを物語るとともに、沖積平野に乏しいことが弥生の遺跡数の少なさにも反映しているものと推測される。

遺跡の種別では、遺物包含地が最も多く45%を超えている。墳墓は、いずれも弥生時代である。高塚古墳は、この地域では東彼杵町においてしか見ることができないことも特徴の一つであろう。

麻生瀬遺跡を考える場合に切り離せないのが五反田遺跡の存在である。五反田遺跡は、麻生瀬遺跡から北北東方向に直線距離で450mほど離れている。川棚川が大きく西側に突出する形で蛇行する位置にある。1972(昭和47)年6月に集中豪雨によって川棚川の堤防が決壊した際、その断面に箱式石棺の小口が露出しているのが発見されたを契機にして緊急の発掘調査が実施された。

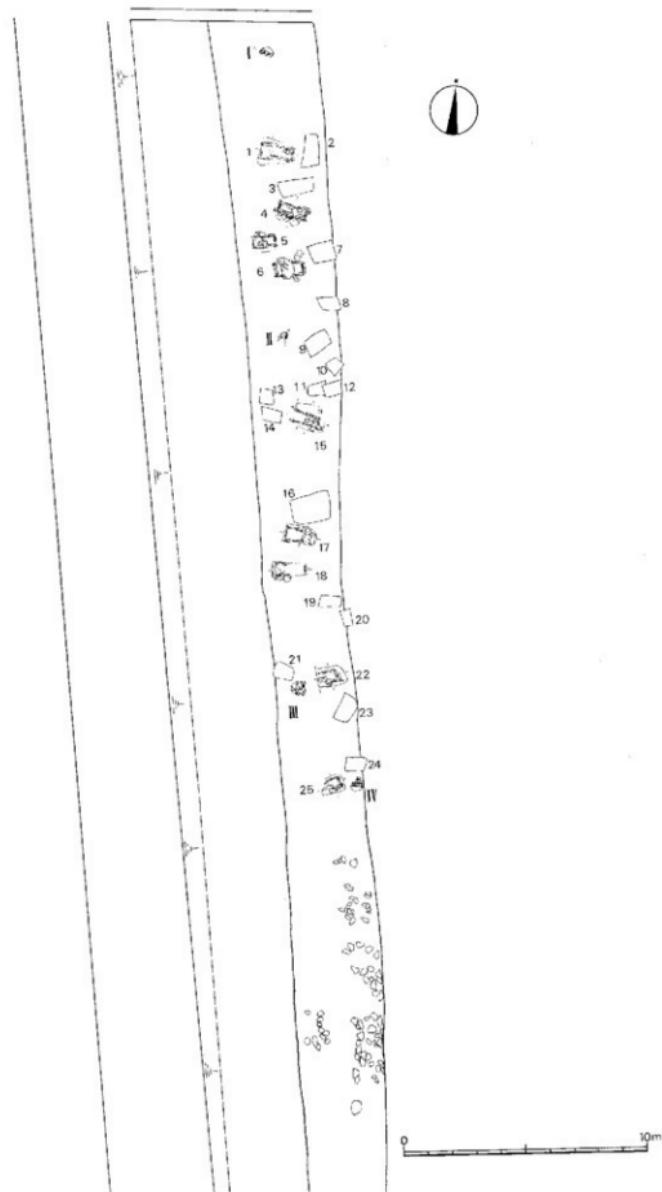
五反田遺跡からは、箱式石棺が5基検出されている。実測図が石棺の上面図に限られているために詳細を知ることはできないが、報告者は、棺身の方位から4グレーブに構成されると考えている。しかし右棺からの副葬品はなく、時期を決定することは難しい。出土した遺物が弥生時代後期に限定されることから、石棺の年代の上限も弥生時代後期と思われる。その根拠の一つが第3号及び第4号石棺の側壁の構築法に板石の一部を重ねる「よろい重ね」がみられることがあげられる。

#### 【参考文献】

正林 康 1981「五反田遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報IV』長崎県文化財調査報告書第55集

第1表 東彼杵郡における遺跡数

時代	川棚町	波佐見町	東彼杵町
旧石器時代	2	4	25
縄文時代	13	15	45
弥生時代	4	1	4
古墳時代	3	0	15
古代	0	0	4
中世	6	8	10
近世	12	38	1
合計(延べ数)	40	66	104
遺物包含地	14	15	47
墳墓	2	0	4
岩陰遺跡	2	1	0
古墳	0	0	10
城跡	4	7	5
窯跡	3	30	0
石造物	5	1	1
キリスト教墓地	1	1	1



第3図 麻生瀬遺跡遺構配置図 (S = 1/200)

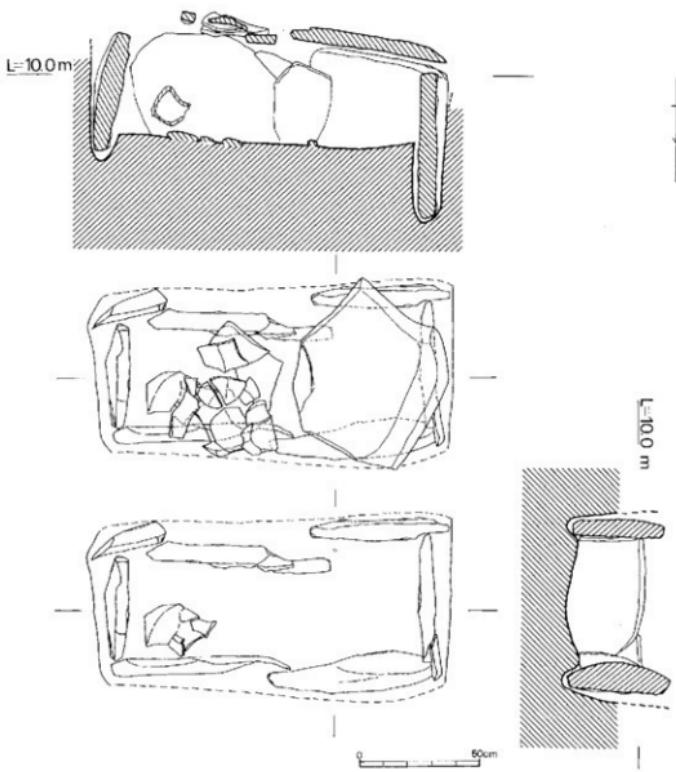
## 第3章 遺構

### 1. 箱式石棺

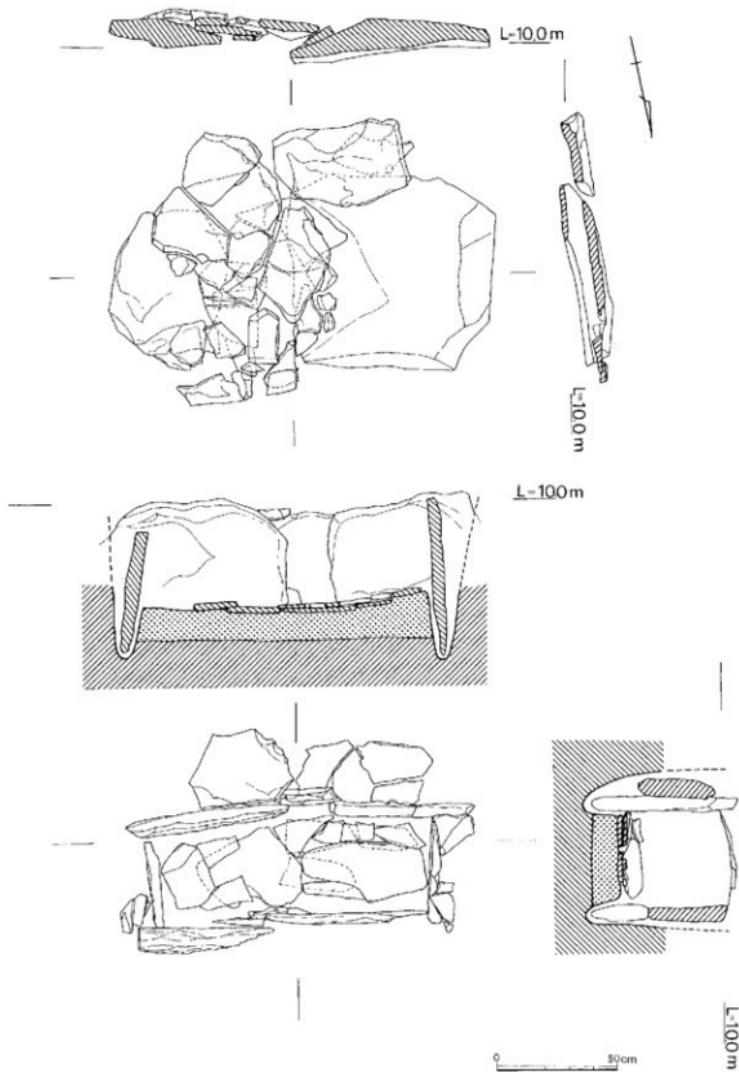
麻生瀬遺跡から検出された箱式石棺の总数は25基にのぼる。狭い面積に密集しており、周辺には相当数の遺構が存在するものと考えられる。今回の調査では、パイプ敷設の掘削溝にかかり、一部を破壊された9基に限定して発掘及び実測作業を行った。それらを検出する際の表土剥ぎ等の作業中にも次々に箱式石棺が検出され、16基が明らかになったが、それらは破壊される恐れがないため現地に埋め戻した。

#### 第1号箱式石棺（第4図）

今回の調査で検出された石棺のうち最も北に位置するものの一つである。蓋石の東半分はすでになく、西側には2枚残るが、そのうちの1枚は十圧のため数箇所に割れている。もう1枚の蓋石が残存し

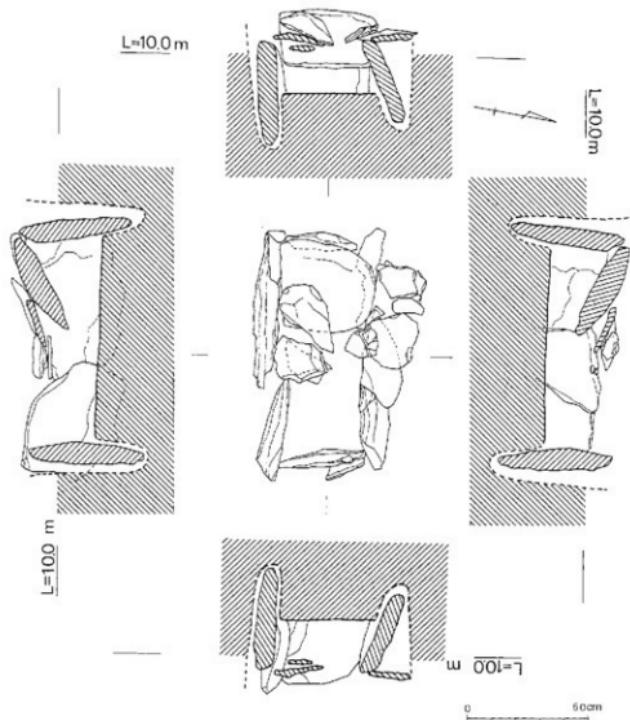


第4図 第1号箱式石棺実測図 (S = 1/20)



第5図 第4号箱式石棺実測図 (S = 1/20)

ていた可能性があるが工事の際に除去されたらしい。石棺は、主軸をN-89°-Eとほとんど東西方向にとる。小口を側壁で挟み込むタイプで、側壁は2ないし3枚で構成されている。石棺の法量は、長

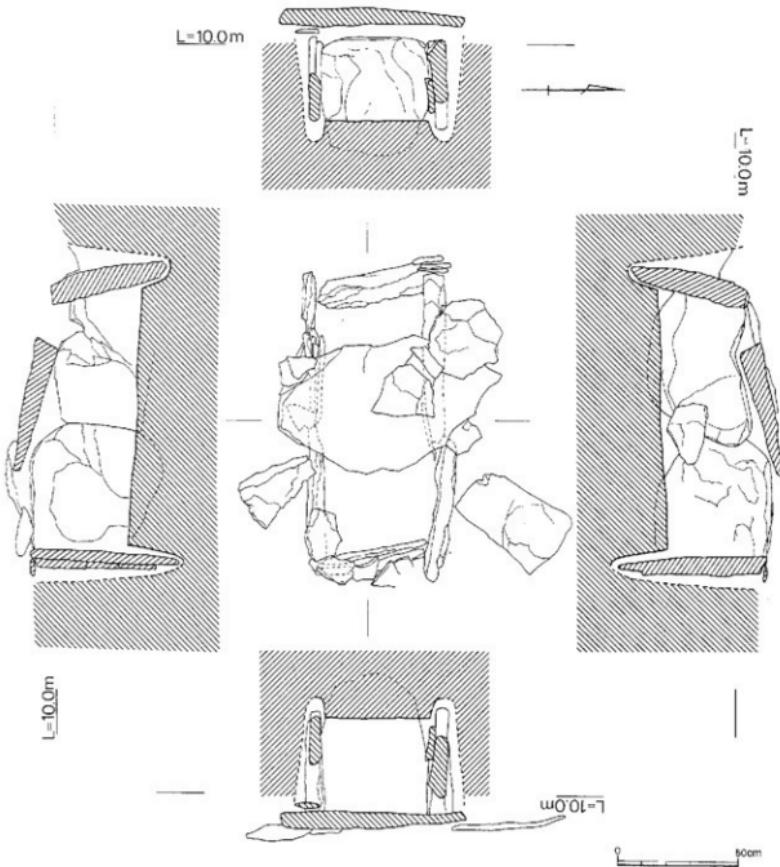


第6図 第5号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )

さ120cm、幅40cm、棺床面までの深さ40cmを測る。棺床は貼床状になっており、棺床向には部分的に小縫が敷かれており、その直上に須玖I式に併行する時期の壺（第19図、図版6）が供獻されていたことから、この石棺の構築年代を弥生時代中期前半と比定できる。

#### 第4号箱式石棺（第5図）

西側の一部が僅かに工事にかかった石棺で、保存状況は良好であった。蓋石は、3枚の大形の平石とその上部に光墳された小形のものからなるが、特に西側のものが大きい。主軸はN-73°-Wをとる。東側の小口は、側壁に挟まれる構造であるが、内側の片方は側壁の内側にありもう片方は側壁の外に出る。側壁の作り方は、北側が2枚の板石からなるのに対し、南側の側壁では西側の板石が小口を大きくはみ出しており、東側の板石との間を外から支える形で数個の石材が充当されている。棺床は、ほぼ全面に薄い板石を敷き詰めている。石棺の法量は、長さ115cm、幅40cm、深さ35cmを測る。棺内の西側に赤色顔料が塗布され、棺外には貼石が施されるなど今回検出された箱式石棺の中ではもっとも厚葬の部類に入るが、副葬品はなかった。また貼石が第3号箱式石棺によって壞されており、3号、4号の先後関係は、4号が古いことがわかる。



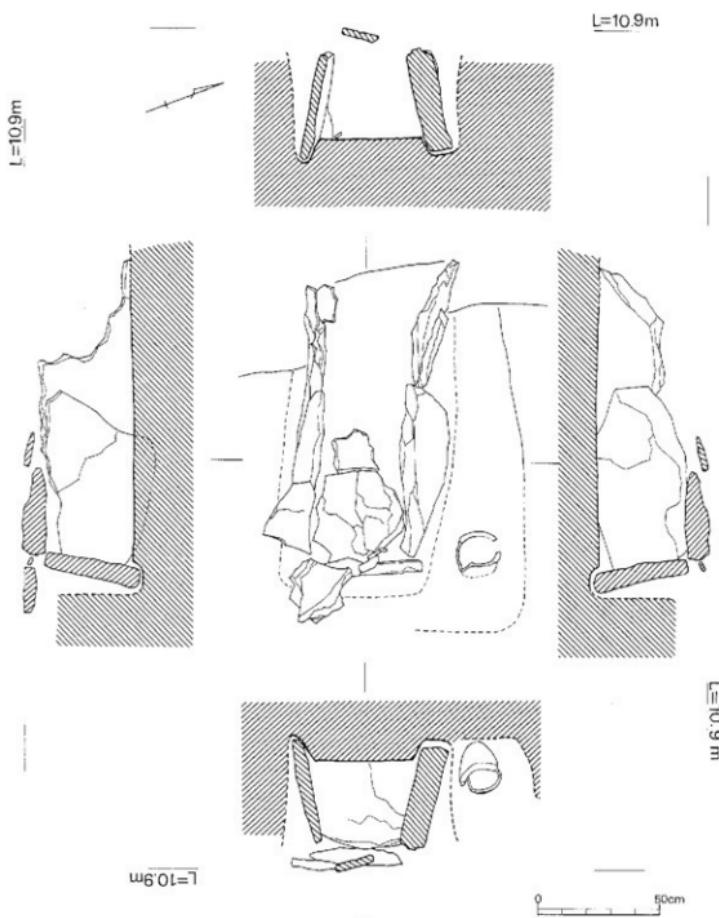
第7図 第6号箱式石棺実測図 (S = 1/20)

#### 第5号箱式石棺（第6図）

東側が溝掘削にかかり、蓋石が半分程度除去されているものの、側壁・小口は完存している。主軸をN-81°-Eにとる。両方の小口を側壁で挟み込む。側壁は2枚からなるが、北側は内側に若干倒れ込んでいる。法量は、長さ85cm、幅30cm、深さ20cmと小形である。棺床には何の施設もなく、副葬品も出土していない。

#### 第6号箱式石棺（第7図）

西側の一部が溝掘削にかかっており、その部分の蓋石は取り除かれた可能性が高い。蓋石は中央部の大きな一枚は残っているものの、東側には残っておらず、側壁の両脇にあるものがその名残である。



第8図 第15号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )

う。平面形は、若干ひしげており、小口と側壁が交互に内外になる。西側の小口は大きく内傾する。また両方の小口とも側壁よりも深く掘りこまれている。側壁は2ないし3枚からなる。北側の側壁は2枚の板石の下部を補強する形で設置している。主軸をN-90°-Eにとり、内法は長さ105cm、幅40cm、深さ40cmを計る。

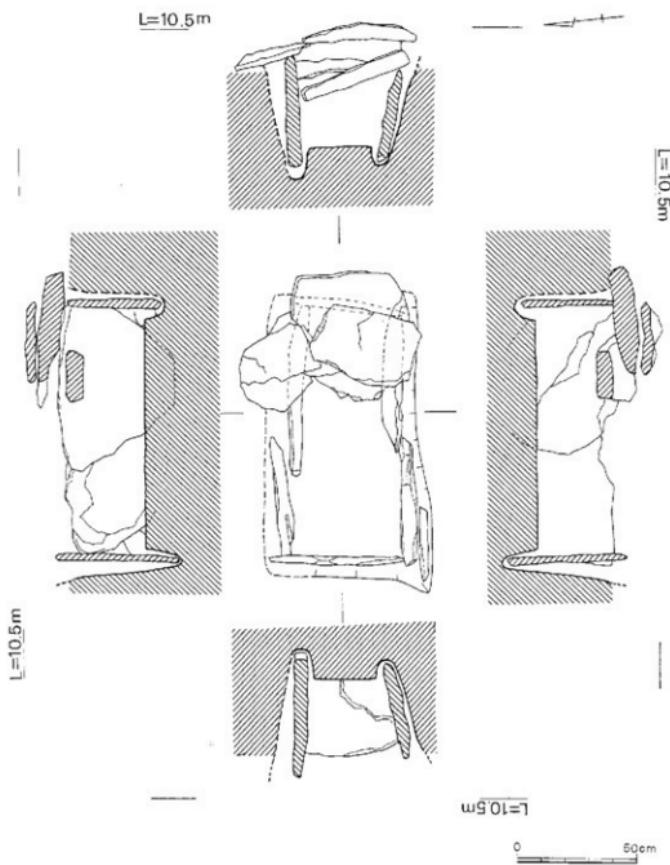
#### 第15号箱式石棺（第8図）

西側の一部が清掘削にかかったため側壁の一部と小口が欠損する。蓋石は、大部分が除去されており、ごく一部が残るにすぎない。断面でみると、小口も側壁も内傾している。小口は東側しか残って

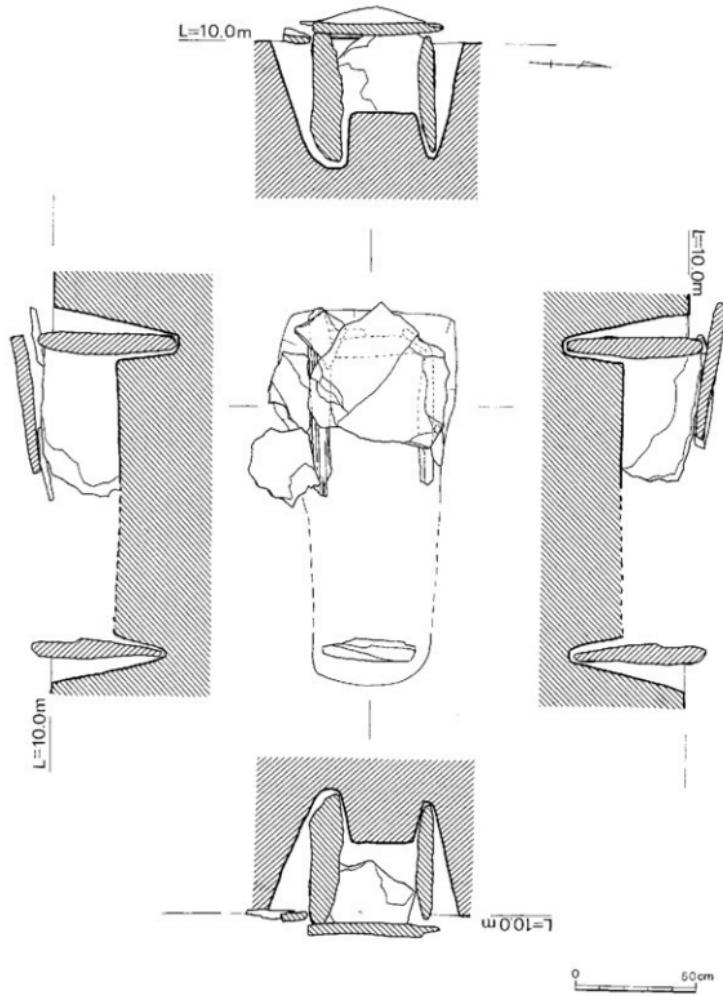
いないが側壁の外に出るタイプであり、側壁は2ないし3枚からなる。西側の側壁と小口は溝掘削によって取り除かれている。主軸はN-76°-Wにとり、内法は長さは不明、幅は棺床面で40cm、深さ35cmである。棺外に須玖1式の鉢（第19図、図版7）が副葬されているように見えるが、これについては二通りの解釈が可能であろう。第15号箱式石棺に伴う副葬と理解する考え方と、副葬土器と石棺を別の遺構と理解する考え方である。側壁の在り方と副葬土器のレベルが側壁よりも深いことからみて、石棺と土坑墓に区別して考えた方がよかろう。

#### 第17号箱式石棺（第9図）

石棺のはば中央を重機によって掘削されておりその際の痕跡が明瞭に残っている。蓋石は北側に残

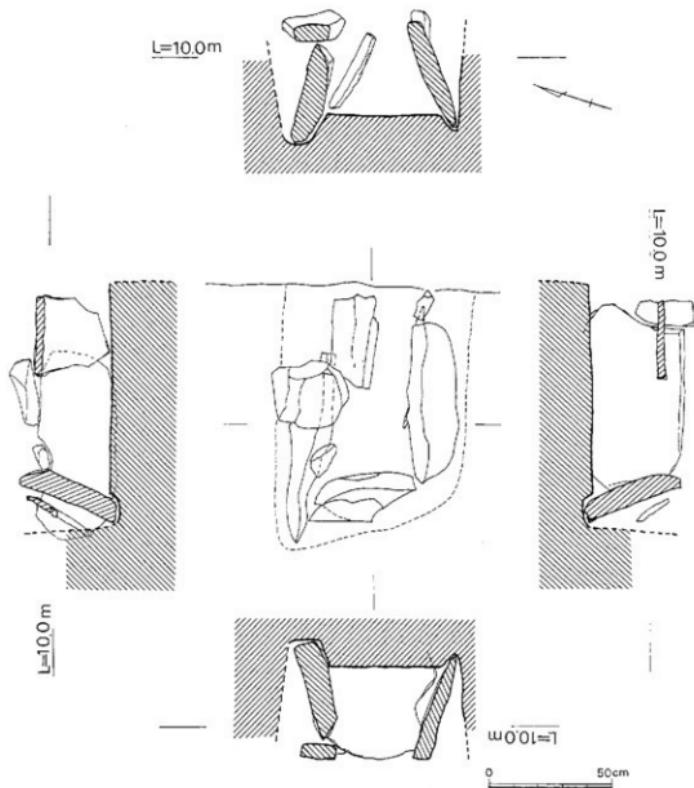


第9図 第17号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )



第10図 第18号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )

る程度で、多くは耕作の際に除去されたと思われる。小口は、側壁と交互に内外になるタイプであり、しかも非常に薄い板材が選択されている。側壁は2枚の板石からなり、中央部で一部重複する。主軸はN-86°-Wにとり、内法は長さ100cm、幅35cm、深さ30cmである。陪葬品は検出されていない。



第11図 第22号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )

#### 第18号箱式石棺 (第10図)

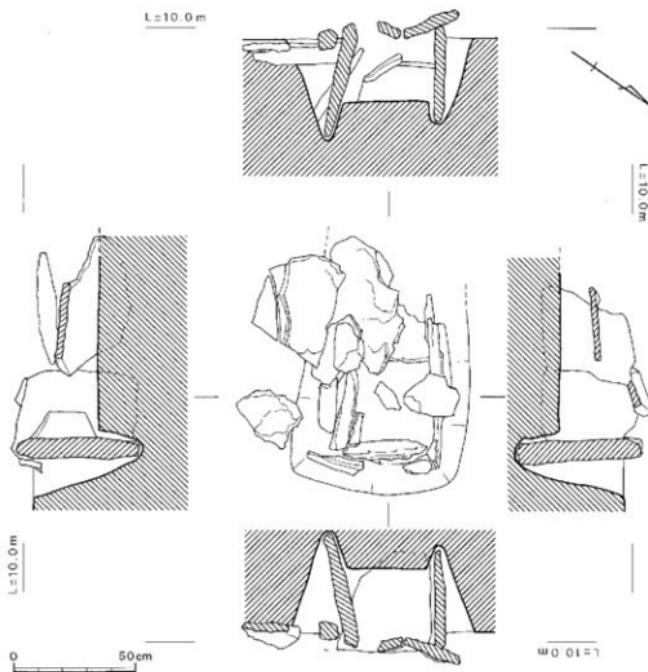
石棺の東半分を工事によって破壊されている。東側には小口が1枚かろうじて残っているのみである。それに対し西側は蓋石から側壁そして小口まで良好に保存されている。主軸をN-87°-Eとはほぼ磁北と直角にとり、内法は長さ120cm、幅35cm、深さ30cmを計る。副葬品は検出されていない。

#### 第22号箱式石棺 (第11図)

石棺の東側を重機によって掘削されており、側壁と小口が破壊されている。蓋石はかろうじて1枚残る程度で、多くは耕作の際に除去されたと思われる。小口は側壁に嵌まれるタイプである。北側の側壁の1枚は大きく内傾しており、さらに小口の外に大きく突出している。主軸をN-73°-Eにとり、内法は長さ不明、幅は棺床面で40cm、深さ40cmである。副葬品は検出されていない。

第25号箱式石棺（第12図）

今回検出された石棺群でもっとも南端に位置する。石棺のほぼ中央を重機によって掘削されており、その際の痕跡が明瞭に残っている。蓋石は北側に残る程度で、多くは耕作の際に除去されたと思われる。小口は側壁の外に出るタイプであり、しかも非常に薄い板材が施設されている。側壁は2枚の板石からなる。主軸はN-86°-Wにとり、内法は長さ不明、幅棺床面で35cm、深さ35cmである。副葬品は検出されていない。



第12図 第25号箱式石棺実測図 ( $S = 1/20$ )



第1号箱式石棺



第1号箱式石馆副葬小壺



第4号箱式石棺



第5号箱式石棺



第6号箱式石棺



第15号箱式石棺



土坑出土の供献小壺



第17号箱式石棺



第18号箱式石棺



第22号箱式石棺



第25号箱式石棺

ここからは発掘していない箱式石棺について記述する。

#### 第2号箱式石棺

1号の東側にはほぼ直行する。蓋石は北側で一部抜き取られているもののそれ以外の部分はよく残っている。

#### 第3号箱式石棺

1号と4号に挟まれた位置にあり、1・4号とは主軸の包囲を逸れる。蓋石はすべて抜かれており、北側の側壁に1枚が大きく倒れている。小口は、側壁と交互に内外の位置になる。

#### 第7号箱式石棺

6号の東側に位置する。蓋石が大きめのものが4個あり、下部構造は不明である。東側は未発掘であり、まだ続くものと思われる。

#### 第8号箱式石棺

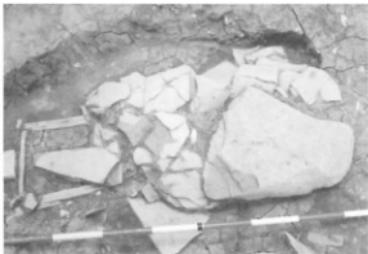
7号と9号に挟まれた位置にあり、蓋石はすべて抜かれている。

#### 第9号箱式石棺

II号壇棺の東側に位置している。蓋石の残りが良好なため石棺部の構造は不明。蓋石は、1枚の大きいものを除けば、残りは小形のものがほとんどである。

#### 第10号箱式石棺

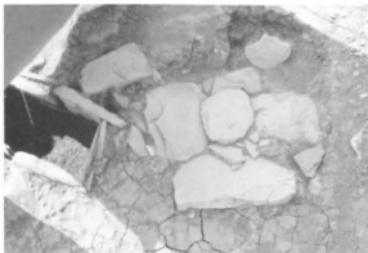
9号の南に位置し、12号によって側壁1枚を残して切られている。



第2号箱式石棺



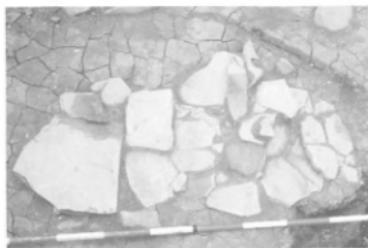
第3号箱式石棺



第7号箱式石棺



第8号箱式石棺



第9号箱式石棺



第10号箱式石棺



第11号箱式石棺(右) 第12号箱式石棺(左)



第13号箱式石棺(左) 第14号箱式石棺(右)



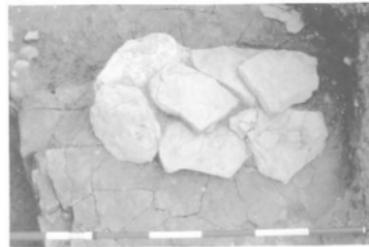
第16号箱式石棺(手前) 第17号箱式石棺(奥)



第19号箱式石棺



第20号箱式石棺



第21号箱式石棺



第23号箱式石棺



第24号箱式石棺

第11号箱式石棺は、12号によって切られている小形の石棺である。

第12号箱式石棺は、10号と11号を切って構築されている。側壁に使用された石材も、砂岩系の部厚い板石で風化が激しいものの、本遺跡で一般的に使用される安山岩の板石とは異なっており、何らかの意図的な違いを見て取れる。

第13号・第14号箱式石棺。13号、14号ともに小形の箱式石棺で、14号には上石が1枚残っている。13号は側壁と東側の小口との間が開いている。

第16号箱式石棺は、他の石棺とは構築方法が異なり、小口は2枚、側壁には3枚程度の石材を用いるが、石材間には隙間がある。16号は切り合い関係の可能性もあり、そうなると箱式石棺の数は合計26基ということになる。

第19号箱式石棺は、18号の南にある小形の箱式石棺である。

第20号箱式石棺は、小口と側壁の一部を検出したに過ぎず、大部分は未発掘である。

第21号箱式石棺は、蓋石が良好に残されており、下部構造は不明。

第23号箱式石棺は、蓋石を1枚残している。

#### 石棺の方位について

石棺の主軸の方位は、大きく2つにグルーピングできる。1つは、ほぼ直交する80~90°になるもので、1, 4, 14, 17, 21, 24の6基。2つめは、3, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 16, 18, 22, 25の12基からなる70~80°の値をもつもの。残る7基はまとまりがなく、分散傾向にある。このことは石棺の方位が等高線に直交する形となるという考え方を否定するものであろう。

#### 石棺の切り合いについて

箱式石棺の棺上には蓋石がマウンド状に設置されることから墓標的な役割を果たしているといわれており、同一墓域で石棺が切り合うことは稀である。本遺跡では、10・11・12号が切り合い関係と認められる。12号が10号及び11号を切って構築されている。10号は主軸が異なることから出自に相異も考えられようが、11号と12号とは主軸方位を同じくしており、切り合いの因果関係はつかめない。前述したように12号が使用石材などからみて本遺跡の中で特殊な地位を占めている可能性は高く、このことが他の石棺を犠牲にして構築したということもできよう。

## 2. 壱 棺

### (1) 第Ⅰ号壹棺 (第13図)

調査区の北端で出土した。2つの壺（第18図土器番号7と8）を上下に組み合わせた壹棺である。横位に埋置され、削平によって上面は失われている。副葬品はなかった。

### (2) 第Ⅱ号壹棺 (第14図)

横位に埋置された单棺である（第17図土器番号4）。上半部は削平により失っている。副葬品はなかった。

### (3) 第Ⅲ号壹棺

実測図が不十分で詳細は不明である。单棺とみられる（第17図土器番号1）。副葬品はなかった。

### (4) 第Ⅳ号壹棺 (第15図)

壺形土器を横位に用いた单棺である（第17図土器番号2）。幸い削平を逃れ、完形に復元できた。副葬品はなかった。

麻生瀬遺跡の壹棺はいずれも日常土器を棺に転用したもので、单棺が多いことが特徴である。埋置方向は横位である。時期的には城ノ越式併行期から須歎I式併行期とみられるが、第Ⅱ号壹棺は中期後半まで降るかもしれない。

石棺蓋と同じく副葬品がみられない。



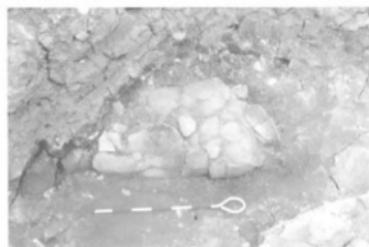
Ⅱ号壹棺



Ⅲ号壹棺①



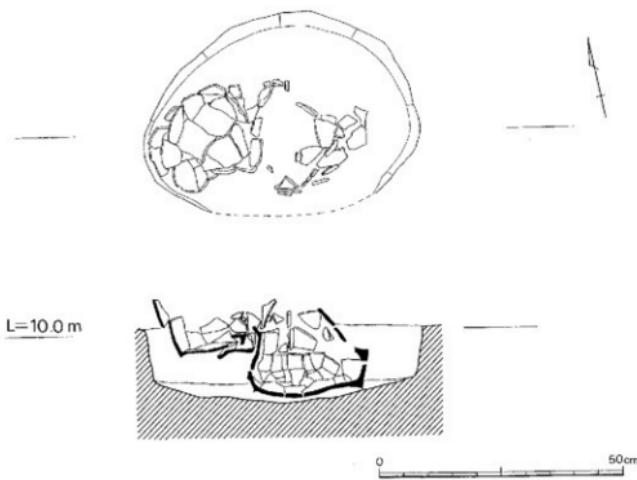
Ⅲ号壹棺②



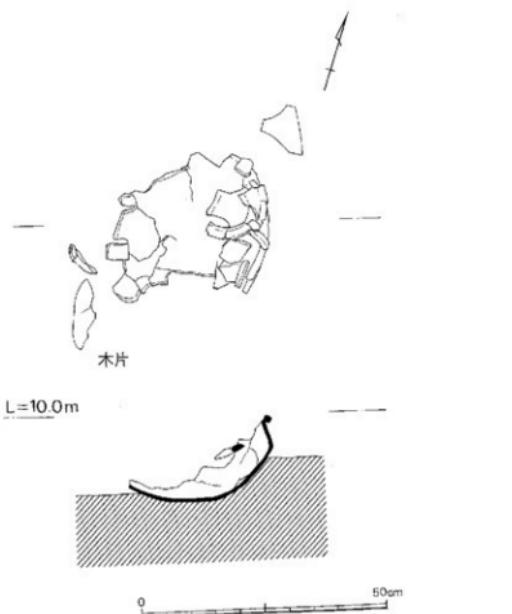
Ⅳ号壹棺



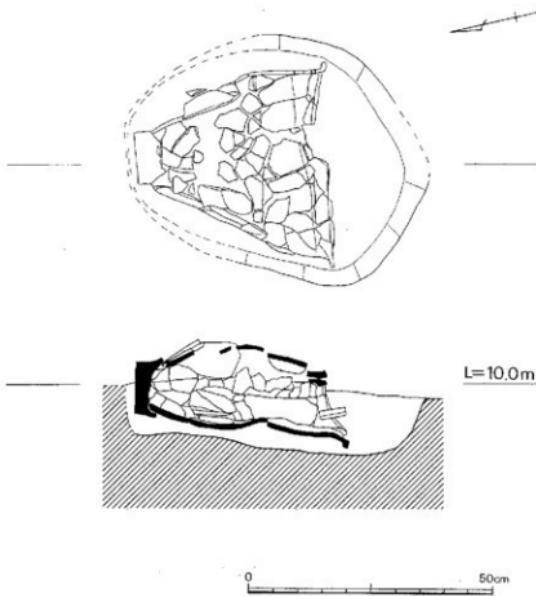
I号壹棺



第13図 第I号墓実測図 ( $S = 1/10$ )



第14図 第II号墓実測図 ( $S = 1/10$ )



第15図 第IV号墓室実測図 ( $S = 1/10$ )

### 3. 集石遺構

#### 河川円礫を用いた不明遺構

これらの遺構は、掘削にかかっておりながら、不本意ながら実測図を作成しておらず、規模等不明なことは誠に遺憾である。写真及び調査中のメモ・記憶をもとに遺構について記述する。

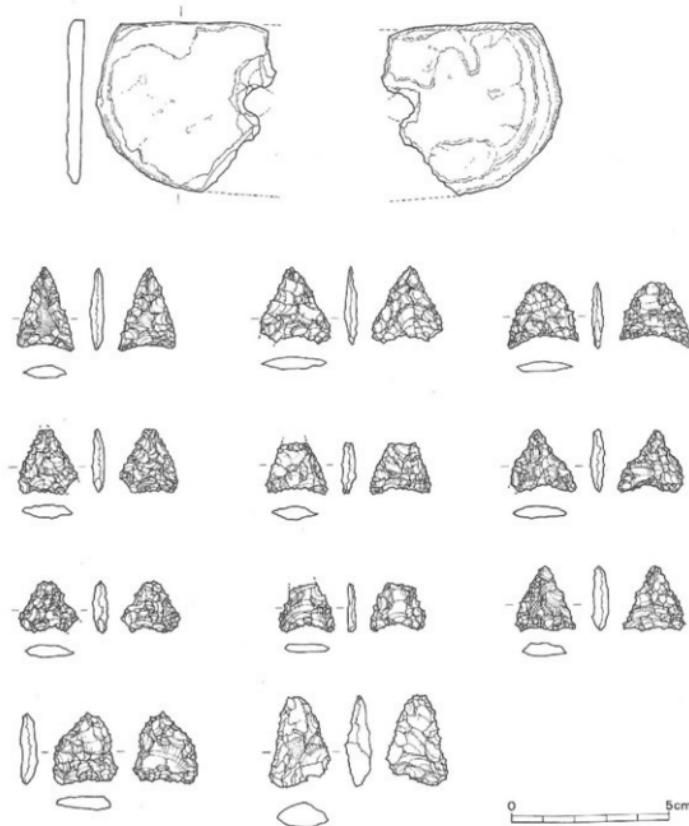
遺構は、基本的にはまず溝（深さ20~30cm）を円形に掘り、それを充填した後に一抱え（人頭大よりも大きい）の河川円礫をその上に配置する。この遺構に伴う遺物はほとんどない。また箱式石棺・壺棺とは分布域を異にすることなどからみて、墓制に伴うものとは思われず、何らかに祭祀的行為のものと評価することが妥当であろう。



## 第4章 出土遺物

### 1. 石 器

包含層から出土した石器は、局部磨製石鏃・打製石鏃・石包丁・削器などがある。1は石包丁である。大きく欠損しており、表面は風化が進んでおりトロトロの状態になっているものの、僅かに研磨の痕跡をみることができる。2は局部磨製石鏃である。浅い凹基の三角鏃で、表裏面の中央部を中心とし研磨痕が看取できる。3～9は、打製石鏃である。3～5は丁寧な調整が施されており、全体を薄く仕上げている。6～9は、左右がシンメトリーにはならず、分厚いことなどから調整途上といふこともできる。10～12は、石鏃の未製品であろう。



第16図 麻生瀬遺跡出土の石器 (S = 2 / 3)

石錆の原材としては、漆黒色の腰岳・牟田系のものと青灰色の針尾・土器田系の2種類があるが、粗緻な量の比較では腰岳・牟田系が卓越する。

二十一 器

### (1) 斜形土器

1は器高42.6cm、口径40.3cm、胸部最大径37.9cmを測る。砲弾形の胴部に若干上がり気味の底部をもつ。口縁部は肥厚させ折り返す。口縁下には断面三角形の貼り付け突帯を2条まわすが、蛇行しながら貼付されており、技術の稚拙さなのか、意図的なものか不明である。色調は外面は黄褐色、内面は灰黒褐色を呈する。胎土には石英・白色粒子・黒色粒子・金雲母・角閃石を含む。外面はナデ成形である。城ノ越式に併行する時期のものと思われる。第Ⅲ号甕棺である。(図版2)

2は器高57.7cm、L1径51.4cm、胴部最大径48.0cmを測る。口縁部内側には蓋受のためか段をもつ。口縁下には断面三角形の突帯を一条巡らす。胴部は若干張るが底部付近ではまって平底の底部に至る。色調は外面は褐色、内面は灰褐色である。胎土には白色粒子を含む。外面はハケ調整である。城ノ越式に併行する時割のものと思われる。第IV号蓋棺である。(図版3)

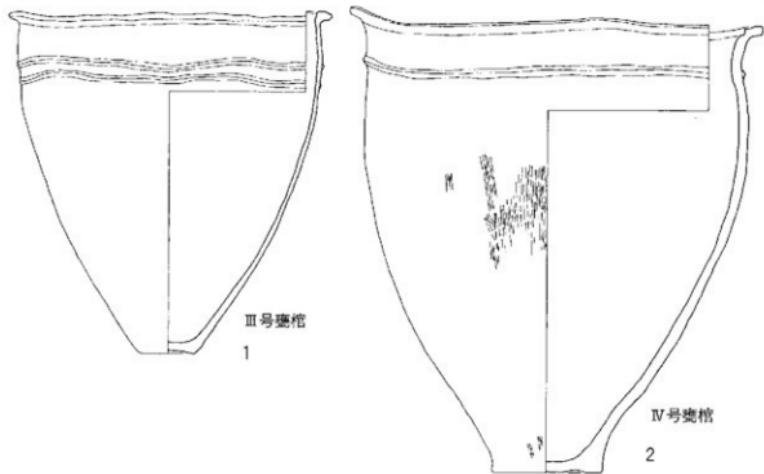
6は器高33.4cm、口径34.0cm、胴部最大径28.2cmを測る。口縁部はL字形に屈曲し、水平に延びる。Li縁平坦部はナデによって若干窪ませている。胴部は張りが弱い。底部は平底である。色調は内外面ともに灰褐色である。胎土には石英粒・長石・角閃石を含む。外面は摩耗しているが、ハケ調整である。須恵I式に併行する時期のものと思われる。出土場所は不明である。(図版8)

(2) 壺形土器

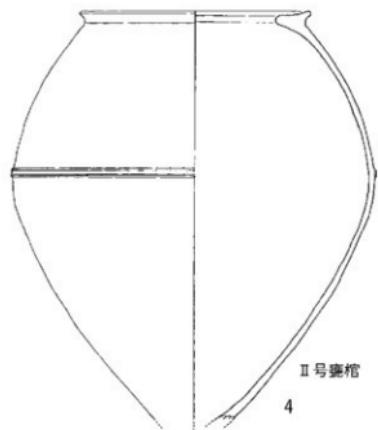
3は器高40.2cm、口径25.4cm、胴部最大径41.0cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁端は矩形におさめる。胴部は張りが強く、やや扁球形をなす。底部は上げ底である。頸部と胴部の境目に断面三角形の突帯を貼り付けている。色調は外面ともに黄灰褐色を呈する。胎土には石英粒・長石・黒色粒子を含む。外面はナデ調整である。城ノ越式に併行する時期のものと思われる。出土場所は不明である。(図版4)

5は器高29.3cm、口径23.0cm測る。口縁部は外反し、口縁端は矩形におさめる。胸部は張る。頸部と胸部の境には断面三角形の突帶を貼り付けている。色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。胎土には石英粒・長石・白雲母を含む。外面は研磨調整で、底部内面には指頭圧痕がのこる。須玖I式新段階に併行する時期のものと思われる。第1号石棺内より出土した。(図版6)

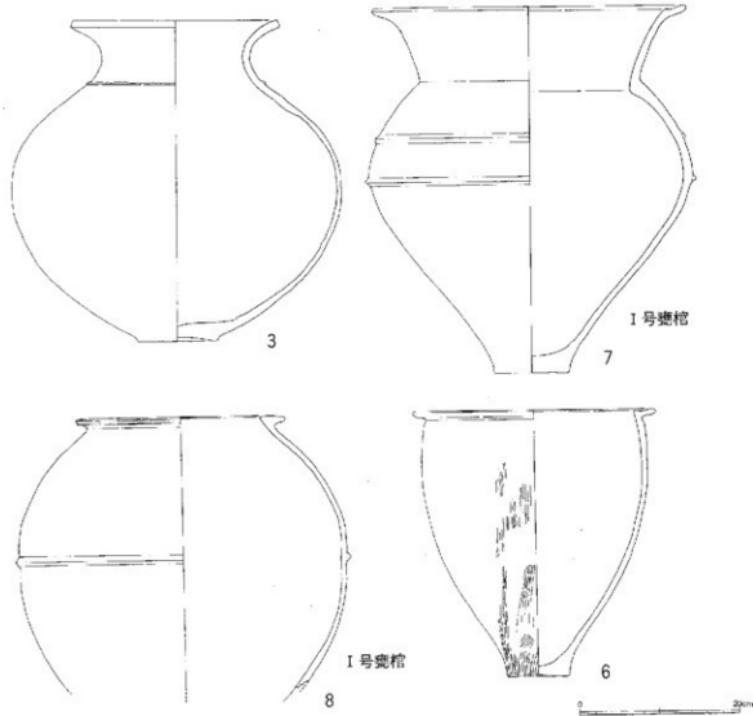
7は器高45.6cm、復元口徑39.3cm、胴部最大径40.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁端には蓋受けのためか浅い段を有する。肩の張りが強く、胴部の最大径は上位にある。底部は平底である。



0 20cm



第17図 麻生瀬遺跡出土の土器(1) (S = 1/6)



第18図 麻生瀬遺跡出土の土器(2) (S = 1 / 6)

肩部と胴部の境目にはそれぞれに、断面三角形の突帯を貼り付けている。色調は内外面ともに明灰褐色を呈する。胎土には石英粒・白色粒子・角閃石を含む。外面は風化して明白ではないが、ナデ調整である。須玖I式古段階に併行する時期のものと思われる。I号壺棺の一部である。(図版9)

8は復元口径26.0cm、胴部最大径40.7cmを測る。底部を欠失するため器高は不明であるが、残存高は33.4cmである。口縁部は肥厚させ強く屈曲する。口縁部を平坦に成形する。胴部中央に最大径があり、断面三角形の貼付突帯を一条巡らせる。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。胎土には石英粒・長石・角閃石を含む。外面は摩耗しているがハケ調整である。須玖I式に併行する時期のものと思われる。I号壺棺の一部である。(図版10)

#### (3) 鉢形土器

29は器高15.8cm、口径18.8cmを測る。口縁部は肥厚させ、外に短く外反させる。口縁下には断面三角形の貼付突帯を一条巡らす。底部は平底である。色調は内外面ともに灰褐色を呈する。胎土には石英・長石・白雲母・金雲母を含む。須玖I式に併行する時期のものと思われる。第15号石棺の側壁付近より出土した。(図版7)

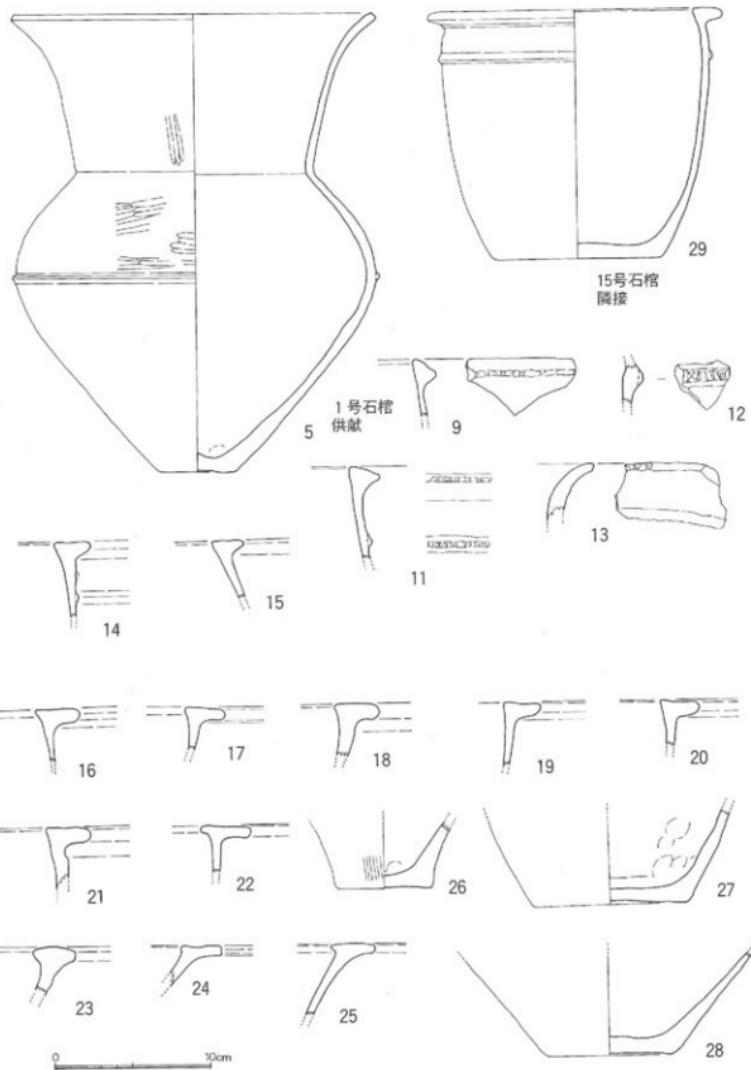
#### (4) 破片資料

9~22は壺形土器の口縁部片である。9、12は刻目突帯文系の土器である。11は亀の甲タイプの壺形土器である。13は板付系の如意形口縁の壺形土器の口縁部片である。14~15は城ノ越式に併行する壺形土器の口縁部片である。16~22は須玖I式に併行する壺形土器の口縁部片である。23~25は須玖I式に併行する壺形土器の口縁部片である。

#### (5) 土器小結

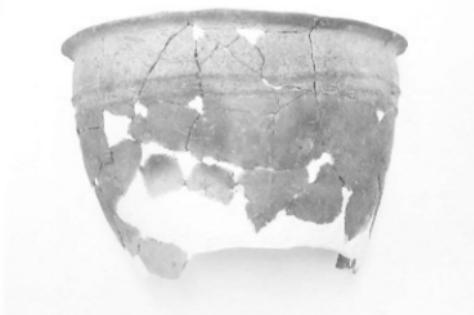
麻生瀬遺跡出土土器は弥生前期、弥生前期末から中期初頭、弥生中期前半の3期に分けられる。このうち石棺墓に伴うものは弥生前期末から中期初頭のもと弥生中期前半のものである。前期上器を包含する層を切って石棺墓群が形成されている。なお、中期後半とみられる壺棺もあるが、主体は前期末から中期前半の2時期と考えられる。

本県の弥生中期土器は北部九州の須玖式様式のもとに包括された時期と考えられるが、麻生瀬遺跡の土器を見る限り、かなりの地域色をもつようである。長崎県本土部の弥生土器は後期の資料に比べると中期の資料が少ないため、地域色を含めた検討が進んでいない現状がある。



第19図 麻生瀬遺跡出土の土器(3) (S = 1 / 3)

図版2 第III号甕棺（土器番号1）



図版3 第IV号甕棺（土器番号2）



図版4 出土場所不明土器（土器番号3）



图版5 第Ⅱ号斐棺（土器番号4）



图版6 第1号石棺内出土土器（土器番号5）



图版7 第15号石棺隔接地出土土器（土器番号29）



図版8 出土場所不明土器（土器番号6）



図版9 第I号甕棺（土器番号7）



図版10 第I号甕棺（土器番号8）



## 報告書抄録

川棚町文化財調査報告書 第1集

## 麻生瀬遺跡

2006年3月20日

発 行 川棚町教育委員会  
長崎県東彼杵郡川棚町中郷郷1506  
TEL0956-82-2061

印 刷 鶴昭和堂  
長崎県諫早市長空町1007-2  
TEL0957-22-6000